2011.8.21

平成２３年度第３０回全国研究協議大会　関東甲信越大会（群馬大会）
パネルディスカッション「被災地の現状と課題」～いま私たちにできること～

宮城県立光明支援学校ＰＴＡ会長　工藤 史

「それからの私たち・そこからの私たち」

本日は、平成２３年度第３０回全国研究協議大会関東甲信越大会（群馬大会）において発表の場を頂戴し、まことにありがとうございます。ご多忙のなか、大会運営にご尽力いただきました皆様に感謝申し上げるとともに、この場をお借りして、現在までのさまざまなご支援に対し、厚く御礼申し上げます。

今回、皆様にお伝えします事は、宮城県知的障がい教育校ＰＴＡ連絡協議会今年度総会において、会員各校からいただいた情報をもとに取りまとめさせていただきました。震災後の、それからの私たちはまだまだ混迷の中にあり、次の一歩をどこに向けるべきか、戸惑いながらの毎日を過ごしています。それでも、皆様の暖かい手、眼差しが、ゆっくりと確実に私たちの歩みを進めてくれる力となっていることを日々実感します。震災後の、そこからの私たちが何を思い何を見つめているのか、少しでもお役に立てるお話となれば幸いです。

『まずはじめに結論』

どのような名称であれ、どのような制度を活用するのであれ、障がい児・者が利用をためらうことのない避難所とその運営方法を確立し、その予算立てをして、これからの災害に備えること。

そのために特別支援学校は、すべての障がいを持つ者にとっての学区を越えた、地域における中核的災害拠点としての役割を持つ避難所とすること。

『なぜなら特別支援学校には』

ソフトウエアのメリット	各障がいに対し知識経験の豊富な人員：教師等がそろっている。
ハードウエアのメリット	各障がいに配慮された構造の建物、福祉用具や、一定程度の医療・看護が可能な設備がそろっている。

『当時の避難所の状況』

一般的な避難所の多くは、残念ながら障がいを持っている方、その家族等にとって、安心してすごせる環境にはなかった。

～ その一例 ～

●電動車いすでようやくたどり着いた体育館。しかし既に他の人でいっぱいであり、なかに入ることすらためらわれる状況であった。横になることはおろか、トイレを使うことさえ困難なため、結局自宅に戻らざるを得なかった。

●発達障がいを持っている児童とその保護者は、少しでも落ち着ける環境を求めて児童とともに車中泊を強行した。しかし、支援物資などの支給を受けるためには避難所に誰かがいなければならず、車中泊の限界とともに、自宅に戻る障がい児とその家族、そして避難所を利用する家族とに二分された。

●医療的要素の強い障がいを持つ者にとっても、一般の避難所は医療的処置が行える環境が望めず、選択肢とはならなかった。

●避難できるものなら、避難していた。ただ、周囲への配慮、自分の子どもに対する気持ち等を含めて考えてみたら、結局避難所にいくことができなかった。

『当時の特別支援学校の状況』

特別支援学校は指定避難所となっていなかった。そのため、緊急的な物資の備蓄もなく、支援物資配給のラインにも当然組み込まれておらず、そのポテンシャルを有効に活用することができなかった。

それでも職員の多くは、自身が被災しているにもかかわらず学校にあつまり、児童の安否確認に奔走した。

『タラ・レバだけれど』

もしそこに備蓄があり、救援物資供給ラインに組み込まれていて、特に障がいを持つ者の避難所、支援拠点としての中核的機能があらかじめ設定されていたら、どれだけのことができたろう。

ライフラインの途絶えた、孤立した自宅や狭い車内で、いつ来るかもしれない余震におびえながら、心細さと不安と、恐怖に打ちのめされることは、もしかしたら回避できたかもしれない。また、そこで受ける心身に対するダメージをいくらかでも和らげることができ、そのあとの回復が少しでも早かったかもしれない。

特別支援学校が災害時の拠点として障がいを持つ者をきちんと受け止めることができれば、地域の障がい児・者とその家族等に対しても、とても心強い存在となるだろう。それは、特別支援学校の卒業生や、また特別支援学級に通う児童、そして地域で暮らす障がい児・者すべてに対してという意味である。

特別支援学校は、すべての障がいを持つ者にとっての学区を越えた、地域における中核的災害拠点となる可能性：潜在的能力を持っているのだから。

そして、結論にいたる。

『そこからの私たち』

現在災害時の物資について備蓄を検討、又は既に実施している PTA は多い。その内容は、生徒数や環境に大きく左右されるため、さまざまなバリエーションを持つ。一例として、光明支援学校における取組みをお伝えしたい。　　～参考資料 1～

～余談１～

『もう一つの課題』

震災発生直後を急性期とするなら、物資が不足する生活に直面する耐乏期がある。避難所から自宅に戻ることができると、今度はその耐乏生活にどのように対応すべきかという、非常に高いハードルが目の前に立ちふさがる。

ボランティア活動の内容として、災害時、特に急性期を過ぎてからの生活支援に対する取組みをうまく誘導できるよう、前述の特別支援学校を中核とした災害拠点では、避難所としての機能と同時に、ボランティア活動に対する情報拠点としての機能も付加することが可能かどうか、検討が必要ではないか。

～余談２～

《我が家の場合　妻の独白》

知的障害を持つ長男と、次男と、原発性肺高血圧症を持つ三男。そのとき夫は３０キロ離れた職場にいた。ライフラインが途絶えるということは、三男にとって生命維持に直結する課題となる。たぶん夫は職場から戻ってこれないだろう、そう確信した妻は決断をした。輻輳する回線をつむぎ携帯電話で救急車を呼び、いつもの病院に避難をする。そのさなかにも必死にﾒｰﾙを繰り返す妻。しかし既に夫の職場周囲は、携帯電話基地局もダメージを受け情報が断絶していた。お互い連絡が取れないまま、我が家の３つの約束を元にお互いの行動を予測する。

1）まずは何をおいても病院にいくこと。
2）病院にどうしても行けない、もしくは行かなくてもいいようなときは指定避難所である中学校に行くこと。
3）玄関に紙で連絡表を貼り付けておくこと。

このシンプルさが私たちを救った。結局職場で一晩を過ごした後、自宅にもどると、玄関先にメモ紙が貼られていた。戦争中の記録映像のようなシュールな光景。

いつもの病院は三男の受入れだけにとどまらず、一家すべてを受け入れてくれていた。ただ、当然食事は三男の分だけで、私たちは始めての耐乏生活を送ることになる。一個のおにぎりを４つに分け、缶入り味噌汁をまわし飲む。妻の機転で、家中の食べられる物と飲み物をかき集めた結果、１週間程度なら何とか持つのだろうけれど、先が見えない状況では節約に徹するしかない。そんななか、食べようとしない妻と私に涙をためながら、お父さんたちも食べないといやだという子ども達。その優しさをうれしくおもいながら、どこまでも非現実的な思いが振り払えない。

「なんだか惨めだ・・・」と涙をためる次男。そんな次男を慰めつつも、食料がないことを理解できない長男。「もっと食べたい。」を繰り返し、次男、三男から「空気読めよ！！」としかられる。状況がわからず、いつものようにおなかいっぱい食べられないし、なんだかわからないけど兄弟たちからおこられるし、地面は間断なくゆれるし、ほとほと困った様子で窓から外を見る長男。まだ、街灯には明かりがもどらない。

電力回復が確認されてから自宅にもどるまで、結局４日間滞在した。